

上もあるという。このことは、自然における遷移を考える上でも重要なヒントになるだろう。

最後の部分に、輸入穀物から検出された雑草種子（散布体）の問題が多くの写真と共に述べられている。輸入時の薫蒸処理では種子を殺すことはできないとのこと。輸入大国としては、外来植物の問題が簡単ではないことを示している。（金井弘夫）

□渡邊高志：ヒマラヤの薬草・秘宝を守れ

21×26 cm 224 pp. 2008. ¥2,500. アップフロントブックス（発行）、ワニブックス（発売）。ISBN: 978-4-8470-1764-4.

この表題の前に「自然と人との生活を感じる旅へ」という前置きがついている。著者はヒマラヤの薬用植物資源の開発を、現地住民との協調のもとに行うべく、ネパール、ブータン、パキスタンで活動してきた。その計画と成果の紹介と共に、これら地域の人々の生活をも紹介するものである。

地域的にはムスタン、ネパール、ブータン、パキスタンと分けて、それぞれの地域の様子がかいつまんで記されており、最後に（116-127ページ）著者らが行っている現地での人材育成事業、植物インベントリ調査研究スキームの紹介がある。これらの部分は読ませることより見せることに重点があるようで、非常に多くの（約300点）美しいカラー写真で、現地の生活や景観が紹介されている。ただ、説明がついているものは約半数しかなく、前置きの趣旨からすると、これはもったいない。

一方、植物プロパーとしては、「ヒマラヤの花と植物」（46-57ページ）および「ヒマラ

ヤの薬草108」（148-168ページ）に植物名と番号付の写真が計175点あり、その説明がそれぞれ207-223ページおよび169-206ページにある。前のグループはその中が園芸的な価値がある、薬用植物とか、有毒植物とか、いくつかのトピックでまとめられているが、前後の文脈からみてとくに関係がなく、「薬草108」にまとめた方がスッキリしたのではないか。というのは、どちらの説明も生薬学的記述が主体であり、同じ種類にはほとんど同じ文が使われているからである。なお、53ページのペルシャアカシア（本書ではネムノキをこう呼んでいる）は *Calliandra* ではあるまいか。ワニブックスの連絡先は、150-███ 東京都渋谷███ (Tel. █████)。 (金井弘夫)

□Ridsdale C., White J. and Asher C. (著), 杉山明子, 清水晶子 (訳): 樹木 20×13 cm 360 pp. 2007. ¥2,800. 新樹社. ISBN: 978-4-7875-8556-1.

私には本書編纂の方針がいまいちつかめないのだが、人間生活における樹木の経済的、感性的有用性を解説することによって、樹木についての理解を深めさせようと意図したものと理解する。章立ては、樹木とはなにか？、生活の中の木、世界の樹木と分けてあるが、前2章は説明文を中心に61ページを占め、最後の章が大部分で約500種類の解説である。

1ページに数種類のカラー写真と説明があり、食用を主とした有用植物と、花を主とした鑑賞植物で占められている。多くの名の知られた有用植物を網羅しているので、形や性質を簡単に索くことができるという点で役に立つ。 (金井弘夫)